

2018.10.10

◎戦時下エピソード—母が手にとった焼夷弾（不発弾）についたリボン

青木千里さんより

※このあいだのゼミの時に、青木さんが話したことを、文面に残して欲しいとお願いして書いていただいたものです（露木）。

お尋ねの件、母にもう一度話を聞いてみました。

1944年（昭和19年）当時、小学5年生の母は名古屋市の北東部に位置する巨大軍事工場、三菱重工業名古屋発動機製作所大幸工場の近くに住んでいました。ここでは日本の航空用発動機生産高の4割以上を生産。広さはおよそ東京ドーム26個分、36.7万坪。

12月米軍はここを狙って空襲。以後翌年4月まで7回に渡って爆撃が行われました。

母のリボンにまつわる思い出は最初の空襲の後だそうです。空襲がおさまって表通りに出てみるとところどころに不発弾についたリボンが目にとまります。信号機の青、ミントグリーンのような色のリボン。

「リボンだ。」その場の風景に合わない物珍らしさとその色に惹かれ少女だった母は手にとりました。

髪につけてみようかとリボンを顔に近づけると硫黄の匂い。一瞬ひるむと大人の声が

「こら！そんな敵のものを持っていたら憲兵に連れていかれるぞ！」

ハッとして、リボンは惜しかったけれど放り出してしまったのでした。

「持って帰りたかったけどね。あれ持ってたらどうなったのかね。」

調べてみると M-69 焼夷弾で親爆弾カバーの中に 20 本前後の子爆弾がまとめられており、その子爆弾が空中から落下する時に安定良くする為数本の帯状の麻布がつけられていたようです。

●焼夷弾の解説

<https://blogs.yahoo.co.jp/boobspinki2/40862741.html>

●米軍の工場で製造される焼夷弾

<https://www.youtube.com/watch?v=uPteVZyF4U0>

初めて体験した空襲の恐ろしさも覚めやらぬ中でリボンに惹きつけられるあたり、この間お見せした指輪の切り抜きといい、その後デパートのアクセサリー売り場で働くことにつながる装身具好きの片鱗でしょうか。

ジュエリー文化史研究会

<http://www.j-bunka.jp/>